2015年06月01日 中日新聞 朝刊震災 25頁

混乱防止 準備がカギ

南海トラフ巨大地震への備えを進めるため、名古屋大減災連携研究センターの協力で連載している想定シリーズは、二回にわたり、被災者が身を寄せる「避難所」について取り上げる。今回のテーマは、避難所の運営。東日本大震災では、避難生活のストレスにより病気になり、死亡するケースも多発した。ストレスを減らすカギは、周到な準備によるスムーズな運営にある。（今村太郎）

「停電だわ…。水道もガスもだめみたい」

すさまじい揺れが襲ったのは、六月初旬の日曜の昼下がり。名古屋市東部に住む備森さん一家は、居間で震える身を寄せ合った。柱や壁にひびが入り、大きな余震に耐えられるか分からない。「避難所に行かないと」。妻の貴子さん(35)と長女(3)の手を引いて、立ち上がった。

「駅前の広場で緊急避難場所（メモ①）って看板を見たことがあったな」。夫の満夫さん(38)がつぶやくと、貴子さんも続けた。

「近所の公園にも、そんな看板があったわ」

だが、調べようにも、電話もインターネットもつながらない。棚から落ちた物が散乱する中、電話台の引き出しから、市のハザードマップを見つけた。「小学校の体育館が、一時的に寝泊まりできる指定避難所（メモ②）」だな。水や食料も配られるはずだ」

地震発生から三時間後、たどり着いた体育館。既に五百人以上が集まっており、空いていたのは出入り口近く。「人が行き来し て、落ち着かないな。風通しのいい窓際とか、壁沿いがよかったけど、ぜいたくは言えないか」。満夫さんは、不満げな貴子さんを取りなすように話し掛けた。

携帯電話もメールもつながらない。職員室のテレビも停電で見られないとい

東日本大震災の発生から4日後、多くのお年寄りが身を寄せた宮城県仙台市の避難所＝2011年3月15日

い、どこで何が起きているのか分からない。すると、そっと言った。

◇　◇

震災発生から三日目。自治会幹部たちが避難所の運営組織を立ち上げ、避難者に割り当てる場所や物資の支給について交通整理が始まった。幼い子ども連れの備森さん一家には壁際の場所があてがわれた。

だが、一家四人のスペースは三畳ほど。貴子さんが父親の無事を確認してほっとしたのも束の間。隣の男性はいびきがひどく、なかなか眠れない。やっと寝付けたかと思ったら、トイレに行こうとした人に足を踏まれ、目が覚めた。

疲労に加え、この三日、シャワーさえできていない。汗のにじんだ服を着替える場所もない。体育館に届きますから。」ばつが悪そうに言った。

◇　◇

一週間後、避難所に備えられたテレビを見て、備森さんの長男が不満を漏らした。「隣の避難所は有名人が炊き出しに来て、おいしそうな飯がいっぱいあった」。貴子さんも、隣の避難所が何度もテレビで取り上げられ、それを見た全国の人から、物資が集まっていると耳にしていた。「うちの避難所にもマスコミが来てくれないからし。同じように困っているのに」

足のむくみや原因不明の下痢、頭痛を訴える避難者も増えてきた。だが、薬は十分ではなかった。長男と長女は「早く、うちに帰りたい」が口癖となった。

メモ① 災害が発生したり、発生する恐れがあったりする場合、身近に迫る危険から逃れるため避難する場所。大地震の場合、津波や火災、建物倒壊などから逃れる場所となる。身近な公園や高台、広場が指定される「一時避難場所」と、同時多発した火災に取り困まれないように逃げ込む大規模な公園などの「広域避難場所」がある。

メモ② 災害の危険から逃れるとともに、自宅に戻れなくなった住民などを一時的に滞在させる場所。小中学校の体育館や公民館などが指定され、いわゆる「避難所」に当たる。東日本大震災では、メモ①の緊急避難場所と間違えるケースが多発し、混乱を招いた。

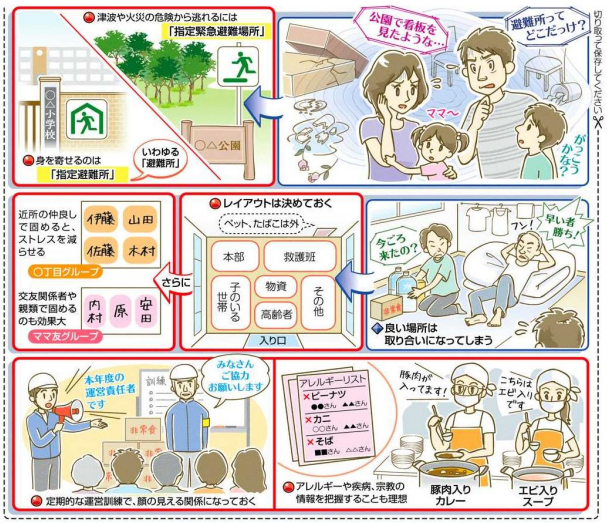
は汁臭さや、かび臭さが漂い始めた。

朝ご飯のサンドイッチを食べ始めたとき、体育館に女性の大声が響いた。「救急車を呼んで！」。男の子が意識を失っていた。「うちの子、アレルギーで、ピーナッツクリームは食べられないのに、目を離した隙に…」。幸い、小学校の保健室には応急処置用の注射があり、男児は意識を取り戻したが、救急車で病院へと運ばれていった。

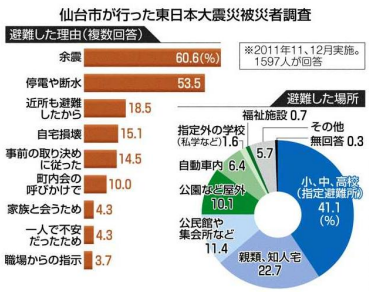
◇　◇

一週間後、避難所に備えられたテレビを見て、備森さんの長男が不満を漏らした。「隣の避難所は有名人が炊き出しに来て、おいしそうな飯がいっぱいあった」。貴子さんも、隣の避難所が何度もテレビで取り上げられ、それを見た全国の人から、物資が集まっていると耳にしていた。「うちの避難所にもマスコミが来てくれないからし。同じように困っているのに」

足のむくみや原因不明の下痢、頭痛を訴える避難者も増えてきた。だが、薬は十分ではなかった。長男と長女は「早く、うちに帰りたい」が口癖となった。



イラスト・安藤邦子



指定避難所以外 物資入手難しく

東日本大震災で約三百カ所の避難所を開設した仙台市が二〇一一年十一、十二月に行った調査によると、避難先で最も多かったのは市があらかじめ定めていた「指定避難所」で、全体の41%。このほか、「親類・知人宅」が23%と一番目に多く、「公園などの屋外」(10%)や「自動車内」(6%)に避難した人も目立った。指定避難所以外で過ごした人たちに物資の入手方法を尋ねた設問（複数回答可）では、震災発生から一週間～二十日後の場合だと、「知人から支援を受けた」が60%、「指定避難所で、全体の41%だった。一方で、「避難所に受け取りに行った」は2%にとどまった。指定避難所以外では支援物資が行き届かなかった状況が浮き彫りになった。

教えて、センセイ！

曽根好徳教授

（地盤工学）

地域の情報 共有不可欠

名古屋大減災連携研究センター協力企画

大規模災害に備え、各自治体は、避難所の運営マニュアルづくりを進めています。避難所の運営にあたることになる学区や町内会、自主防災組織などを巻き込んで、地域の特性を加味できれば、より有効なものとなります。

事前準備が大切という意味の「段取り八分」という格言がありますが、**避難所の運営がスムーズにできるか、できないかは、まさに事前の備えが大きかどうかにかかっています。**

運営する側が、避難者のスペース配分などに当たる「施設担当」や、食料の分配に当たる「食料担当」などの役割分担を事前に決めておけば、想定ストーリーにあるような場所取りや物資の「早い者勝ち」などの混乱は防げます。

地域の職能を共有することも不可欠です。家族構成や年齢、職業や体の不自由な人の有無、職業、食事のためのアレルギー体質や家族について、情報を出し合いましょう。

それらをもとに避難所で各世帯の配置も決めておくと、スムーズに運営が始められます。ストレスを減らすためにご近所やママ友同士を近くに置いたり、持病のある人を救護所の近くにしたりすることもできます。

ストレスを減らすために、重要な役割の役員が転居していたとき、情報が古くなると混乱を招きます。マニュアルを地域情報の更新ストができあがったら、訓練を実施してください。運営に当たる役員や、地域住民と親交を深める意味でも、ぜひ実施したいです。

心の病や引きこもりなどの事情で「在宅避難」を余儀なくされる人もいるでしょう。

過去の大地震の被災者への聞き取りで、在宅避難者が避難所で物資を受け取ると白眼視されたという経験を耳にしました。

東日本大震災では、メディアへの露出が多い避難所に救援物資が集中することもありました。自治体や被災地以外の人には、偏りなく物資が届くように心掛けることも求められます。

「備える」は毎月第一月曜日掲載。次回は7月6日で、引き続き「避難所」を取り上げます。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています